Programm　Musik in Worten - Worte in Musik

Gregorio Allegri　*Miserere mei, Deus*
G. アレグリ *(1582–1652)*　「神よ 私を憐れんで下さい」

［第 1 合唱隊］Sp.1 櫻井愛子　Sp.2 金成佳枝　Alt. 奥村泰憲　Tn. 堀越尊雅　Bs. 阿部大輔
［第 2 合唱隊］Sp.1 石井朝奈　Sp.2 池田真紀　Alt. 岩渕絵里　Bs. 關 秀俊
［グレゴリオ聖歌］沼田 臣矢

Heinrich Schütz　*Musikalische Exequien SWV 279-281*
H. シュッツ *(1585–1672)*　「音楽による葬送」

Ⅰ Konzert in Form einer deutschen Begräbnis-Missa SWV 279
【ドイツの埋葬式ミサの形式によるコンチェルト】
„Nacket bin ich von Mutterleibe kommen“【裸で母の胎内から出た私は】
(ソリスト)
Sp.1 Marie Luise Werneburg　Sp.2 金成 佳枝　小松 奈津子
Alt. 佐藤 智子
Tn.1 Tobias Mäthger　Tn.2 沼田 臣矢
Bs. 關 秀俊　楢﨑 誠広　磯谷 大樹

Ⅱ Motette „Herr, wenn ich nur dich habe“ SWV 280
モテット【主よ あなただけが私にあれば】(二重合唱)

Ⅲ Canticum Simeonis SWV 281【シメオンの賛歌】
―„Herr nun lässet du deine Diener in Frieden fahren“
【主よ、今こそこのしもべを安らかに去らせてください】
―„Selig sind die Toten“【死せる人は幸いである】

チェロ：山本 徹　ヴィオローネ：角谷 朋紀　オルガン：勝山 雅世

Pause 休憩 15 分

Georg Friedrich Händel　*„Dixit Dominus“ HWV 232*　「主は仰せになった」
G. F. ヘンデル *(1685–1759)*

1 合唱　Dixit Dominus【主は仰せになった】
2 アリア (Alt)Virgam virtutis tuea【主はあなたの力ある杖を】
3 アリア (Sop)Tecum principium in die virtutis【あなたの力で】
4 合唱 Juravit Dominus【主は誓いをたて】
5 合唱 Tu se sacerdos in aeternum【あなたはとこしえの司祭である】
6 ソロと合唱 Dominus a dextris tuis【主はあなたの右に立ち】
7 ソロと合唱 De torrente in via bibet【主は道のほとりの川から】
8 合唱 Gloria Patri, et Filio【父と子と聖霊に御栄えあれ】

長尾 良子 (Nr.1.6)　新明 裕子 (Nr.1)　小沼 俊太郎 (Nr.1.6)　横町 あゆみ (Nr.2)　Marie Luise Werneburg（Nr.3）
高山 ゆみこ (Nr.6)　古賀 裕子 (Nr.6)　堤 智洋 (Nr.6)　佐藤 悠子 (Nr.7)　岡田 愛 (Nr.7)

オーケストラ：VCT バロックオーケストラ (コンサートマスター 高木 聡)

演奏にあたって

言葉と音楽をめぐる３つの視点

四野見 和敏

作曲家が言葉 (歌詞・テキスト) に音やリズム、そしてハーモニーを付ける場合、その作曲の姿勢は様々である。グレゴリオ聖歌の影響が残る、バロック初期のアレグリ。イタリアの合唱書法をドイツ語で展開したシュッツ。そして言葉のリズムを追求したヘンデル。それぞれが言葉と音楽の関係を探求し、試し、そして新たな世界を創造した。私たちは、さらにその奥のその先にある世界を知るために、感覚を研ぎ澄ませて演奏したいと思う。

【Allegri：Miserere mei「神よ 私を憐れんで下さい」】演奏者は、正面の祭壇前で歌う第１合唱隊 (５人) と、２階バルコニーでグレゴリオ聖歌を朗唱するソロ奏者、そして後方のオルガンの傍で歌う第２合唱隊 （４人) に分かれて配置される。歌われるラテン語のリズムは、ドイツ語の様に強弱のアクセントで規定されない。飛翔 (elan) と休息 (repos) を繰り返しながら、文章の出発点から終止点までよどみなく流れる。２つの合唱隊は詩篇の聖句を、毎回同じメロディーとハーモニーで歌う。聖句の冒頭は必ず全員がハーモニック (和声的) に歌い、その後すぐに各パートが流麗な旋律で絡み合い、ポリフォニック (多層的) な流れで終止に向かっていく。音楽の構造は同じでも、聖句の違いによって言葉の抑揚も変化するので、毎回同じ印象はない。この豊かな抑揚の変化こそ、ラテン語のもつ特徴で、生命そのものである。同じメロディーを違う言葉で歌っても言葉の意味は損なわれない。それどころか言葉が音楽を利用し神秘性を高める力があることを、アレグリはこの曲で示している。2つの合唱隊の響きのコントラストもある。第1合唱隊が低音域から中音域の濃い、深みのある音色で内面の葛藤や意志を表現する一方、第2合唱隊は中音域から高音域で、魂の救いを希求する清らかな響きとなって上部から降り注ぐ。

【Schütz：Musikalische Exequien「音楽による葬送」】ロイス伯爵は死の1年前、聖書やルターのコラールの詩句を書き込んだ棺を作り、シュッツに作曲を依頼した。ドイツ語のテキストのテーマは死、過ぎ去った過去、復活そして永遠の命である。1636 年、ロイス伯爵の葬儀の際、この曲は初演された。曲は3部構成の葬送音楽で、Ⅰ部は Konzert (後の時代の協奏曲ではない) 様式で、 ６人のソリストと合唱で対比させながら進む。個人の心情表現をソリストが歌い、共同体の祈りを合唱が歌う。Ⅱ部は二重合唱でコーリ・スペッツァーティ (合唱隊を離れた位置に配置する) 演奏様式である。言葉が空間によって方向性を持ち、豊かな音響で広がって行く。第Ⅲ部は、祭壇の前で「現世の人間の合唱」がシメオンの賛歌を歌い、それを天国へと導く「天使の合唱」が教会の上部で歌われる。シュッツの演奏は言葉の表現「語ること」に重心が置かれている。もしも音楽 (旋律) 的な美しさだけで歌うとすると、言葉の意味がにぶり言葉のリアリティーが後退する。言葉の発音・アクセントだけを追求しても、音楽の感覚的美しさがなければ人の心が動かない。シュッツは常に、この難しいバランスで歌うことを私たちに強いている。私たちが目指す理想的な演奏は、音楽と言葉の一体化である。音楽の機能がドイツ語のアクセントやリズム、発音などに合致する時、言葉は力強い意志を現わし伝達力を持つ。題名にある Musikalische(音楽による) とは、そのような音楽の力を言い現わした言葉で、シュッツ自身がこの作品で証明してみせている。

【Händel：Dixit Dominus「神は仰せになった」】この曲は言葉の持っているリズムが強調され、劇的効果を上げている。1曲目の ”Dixit”(言った)、4曲目 non poeni tibi(悔いることはない)、６曲目 confregit（破壊する・粉々にする）、ruinas (破壊で満たす) 、Conquassabit(壊す・激しく揺する) などにヘンデルが付けたリズムは、いずれも刺激的、衝撃的で生々しい。リズムで言葉を動かし、言葉の内部にあるエネルギーや感情を、より辛辣に激しく外側に押し出す。ヘンデルはリズムと言う運動性や推進力のある要素を言葉に与え、高揚感や緊張感のある音楽を生んだ。アレグリやシュッツと違い、音楽を言葉のリズムで満たし、完全に支配しようとしている。この詩篇のテーマは、神のとてつもない大きな力と権威、異端者との激しい戦い、破壊、混乱、荒廃、そして讃美である。あたかも壮大な歴史オペラが目の前で繰り広げられているようだ。雄弁でスケールの大きいドラマである。その本質は「動＝リズム」である。